

不登校対応に関する一考察

～村山由佳著『雪のなまえ』に見る「勇気づけ」の働き～

A consideration on dealing with school refusal

～The work of “encouragement” in “Name of Snow” by Yuka Murayama～

小峰 秀樹

Hideki KOMINE

Key words: 勇気づけ (Encouragement)、普通 (Normal)、癒し (Healing)

はじめに

私が教員となった1980年代、教育現場は「第3の荒れ」と呼ばれる状態だった。社会にうまく適応できない子どもたちは、自分の行き場のない思いを「暴力」という形で表出していた。現場では、そのような子どもたちに対して「特別指導」を繰り返し、最終的には「退学」という形で決着をつけるということが行われていた。

保坂亨によれば、「学校恐怖症」「学校ざらい」「登校拒否」と名称の変化はあったにせよ、「不登校」の問題は1960年代から研究されていたらしいが¹、現場の感覚では、「第3の荒れ」がひとまず落ち着きを見せ始めた段階で「不登校」の問題が顕在化してきたように思える。

文部科学省の資料によれば²、「小・中学校における不登校児童生徒数」は、2001年(138,722人)をピークに一時期減少傾向を見せ、2003年からは12万人台で推移している。2010年から2013年にかけては11万人台にまで減少した。しかし、2014年から再び増加傾向を見せ始め、2016年には再び13万人の声を聴くこととなった。それ以降、増加の一途をたどり、2019年には181,272人

と、過去最多の数を記録している。児童生徒の総数は、150万人も減少しているにも関わらず。

この間、文部科学省をはじめとした行政や学校は手を拱いていたわけではない。行政をはじめとした様々な機関が、いろいろな施策を考え対応してきた。それにも関わらず、「不登校」の数を減少させることはできていない。私たちは、この「不登校」の問題に関して、40年以上も有効な対応策を見つけられないのである。

このように、「不登校」の問題は一筋縄ではいかない課題であるが、少しでも参考になればと思い、執筆することにした。

村山由佳「雪のなまえ」

村山由佳は、「星々の舟」で2003年上半期の直木賞を受賞して、作家としての地位を固めた。現在では、「ダブルファンタジー」に代表されるような「大人の恋愛小説」の名手(渡辺淳一が男性側からの恋愛を描いたのに対して、村山は、女性側からのそれを描いている)として知られているようだが、一方で、「天使の卵」や「お

¹ 保坂亨「不登校をめぐる歴史・現状・課題」(2002「教育心理学年報」第41集P157～P169)

² 文部科学省「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校当生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」(2019)

いしいコーヒーの淹れ方」シリーズに代表されるような「せつない恋の物語」も書いている。また、恋愛小説の名手であるが、その範疇に収まらない作品も書いている。伊藤野枝の生涯を描いた「風よ、あらしよ」、過労自殺を扱った「風は西から」、そして、不登校問題に言及した「天翔る」「雪のなまえ」などの作品である。

さてここで、「雪のなまえ」という作品について、その内容を少し紹介しておこう。

「雪のなまえ」は、東京の小学校で「いじめ」の被害に遭った小学校5年生の女の子（雪乃）が、長野の大自然の中で、様々な人々との交流を通して成長していく「再生」の物語である。

物語は、雪乃の父親（航介）が、会社を辞めて長野で暮らすことを宣言するところから始まる。母親（英理子）は反対する。英理子はしっかり者で、編集の仕事にやりがいを感じているが、学歴がないことにコンプレックスを抱いており、娘の雪乃には「いい学校」に行くことを望んでいる。母親のそんな思いを体現するように、東京で暮らしていた時の雪乃は、中学受験のために塾通いをしていた。航介からの突然の提案は、東京で編集の仕事が続けたいと思っている英理子にとっては寝耳に水の出来事であった。しかし航介は、英理子の反対を押し切って、祖父母（雪乃にとっては曾祖父母となる茂三とヨシ江）の暮らす長野に、雪乃を伴って移住してしまう。こうして、母親だけが東京に残って暮らすという奇妙な生活が始まっていくのである。

東京で、友達がいじめられているのを庇ったことが原因でいじめられることになってしまった雪乃は、学校に行くことを考えるだけで過呼吸になってしまうほどに追い詰められていた。学校を変わったからと言って、その傷がすぐに癒されるということなどない。学校に通うことのできない雪乃をありのままに受け入れてくれる茂三やヨシ江と暮らすうちに、少しずつ雪乃の心は癒されていくが、胸いっぱい苦しみを抱えている雪乃は、時に、フラッシュバックに襲われる。そうして、「学校に行くことができている自分」「大好きな母親の期待に応えることができている自分」を責めてしまう。物語は、回復の兆しを見せたかと思うとまた、元の苦しみの状態に戻ってしまう雪乃の様子を、細かく描いていく。

田舎で暮らしたことのなかった航介や雪乃を支えてくれたのは、航介たちが身を寄せた茂三の家の近所に住む航介の幼馴染の広志とその息子の大輝であった。

航介は、茂三の農業を手伝ううちに、過疎の村に「納

屋カフェ」を開くことを考える。新しいものを嫌う田舎では、そんな航介の考えは、なかなか受け入れてもらえない。そういう中であって、航介を支援してくれたのが広志である。

広志は、納屋カフェを開こうとする航介に、今は使われていない自分の家の納屋を提供する。納屋カフェのオープンに向けて、航介は少しずつ納屋のものを片付け、設備も整えていく。その過程で、雪乃や広志、そして広志の息子の大輝も手伝う。

大輝の母親（優美）は、無理が祟って精神に支障を来たし、一時期入院していた。今は、自分の実家で療養しており、広志や大輝とは一緒に住んではいない。そんな事情を抱えているからなのか、大輝は、一般の小学校5年生と比べると、雪乃の事情を理解できていたのかもしれない。学校に通うことができている雪乃に対して、ごく自然に接してくる。

大輝は、物語の終盤で、突然仲のいい友人（豊、賢人、詩織）を雪乃の家に連れてくる。雪乃が学校に行けるようになるために、彼なりに考えてのことなのだろう。しかし、心の苦しみからまだ自由になれていない雪乃にとっては、それは大きなお世話だった。雪乃は抵抗するが、毎日訪ねてくる豊、賢人、詩織たちと、次第に仲良くなっていく。大輝だけでなく、雪乃に関わる多くの人が、無理にとは言わないが、自発的に雪乃が学校へ行けるようになることを気にかけていた。

夏休み、子どもたちは学校へ行かなくなる。その代わりに、納屋カフェが子どもたちのたまり場になる。大輝、豊、賢人、詩織に加えて、一人また一人と、口コミで納屋カフェにやってくる子どもは増えていく。最初は抵抗のあった雪乃も、二、三日すると打ち解けることができた。

夏休み最後の日、大輝は、雪乃に向かって「あのさ、雪っぺ、わかってる？ クラスン中で、雪っぺが知らないやつのほうがもう少ないんだってこと」と言う。そのことに気づいた雪乃は、詩織に向かって「よかったら、始業式、一緒に行ってくれる？」と言うのだった。

勇気づけ

オーストリアの精神科医だったアルフレッド＝アドラーは、当初は、ジークムント＝フロイトと一緒に「精神分析」の研究に携わっていた。しかし、途中からフロイトと離れ、独自の研究を進めていく。それが「個人心理学（アドラー心理学）」と呼ばれるものである。

「個人心理学」の「個人」とは、「分割できない」という意味である。フロイトが人間の心を「意識」と「無意識」に分割して考えたのに対して、アドラーは「意識と無意識は矛盾しているように見える場合でさえも、同じ一つの目的に向かって統一的に相互に補うように働いている」と「統一性」を主張する（全体論）。また、フロイトが「人間は、過去の経験が原因となって今の行動が規定されている」という「原因論」を提唱したのに対して、アドラーは「人間の行動にはすべて目的があり、自分が現在置かれている状況は自分の目的を達成するために自らが選択している」という「目的論」を提唱しているのである。このような考え方の違いから、アドラーは、フロイトのもとを去り、独自の研究を進めていった。

アドラーが最終的に目指したのは「共同体感覚」の獲得である。アドラー自身は「共同体感覚」について明確な定義は行っていないが、個人的には、他者を「仲間」と考えられ、「自分の居場所がある」と感じられることなのではないかと思っている。その「共同体感覚」を身に着けるために用いられるのが「勇気づけ」である。

この「勇気づけ」についても、アドラーは明確に定義していない。しかし、「勇気」というものについての有名な言及はある。

「勇気とは、リスクを引き受ける能力である」

「勇気とは、困難を克服する能力である」

「勇気とは、協力できる能力の一部である」

以下、ヒューマンギルド代表の岩井俊憲が、この3つに基づいてまとめた「勇気づけ」というものについて触れておく³。

岩井は、「勇気づけの技術」として、次の7つを挙げている。

- ①加点主義
- ②ヨイ出し
- ③プロセス重視
- ④協力原理
- ⑤人格重視
- ⑥聴き上手
- ⑦失敗を受容

①の「加点主義」とは、高い目標を設定してそれとの

差（できていない部分）に注目するのではなく、過去と比較して伸びているところ（できている部分）に注目するということである。往々にして私たちは、できていない部分に注目して尻を叩くようなことをしてしまう。

②の「ヨイ出し」とは、「非建設的な行動（一般的に言われる「困った行動」）」には注目しないで、「建設的な行動（一般的に言われる「あたりまえの行動」）」に注目し、それをフィードバックするということである。私たちは、「あたりまえ」の行動については、注目することを忘れてしまっている。

③の「プロセス重視」とは、なしおえた成果（結果）に注目するのではなく、取り組んでいる過程に注目し、それをフィードバックするということである。しかし、結果ばかりに注目してフィードバックしていることのなんと多いことか。

④の「協力原理」とは、他者との競争による努力（他者を振るい落として勝とうとする努力）ではなく、他者と協力して伸びていこうとする努力（お互いの足りないところを認め合い、補っていこうとする努力）に注目することである。しかし、現実の世界では、「受験」に代表されるように、競争に勝つことを求められる場面が多い。

⑤の「人格重視」とは、「行為」と「行為者」を分ける考え方である。「罪を憎んで人を憎まず」ということである。「弱虫」「臆病」などのような否定的な言葉で評価しないということである。肯定的な言葉かけ、具体的な事実に基づいた言葉かけを行うということである。しかし私たちは、表面的な行動に注目して、否定的な言葉を投げかけがちである。

⑥の「聴き上手」とは、話された「言葉」の意味を聞き取るのではなく、その言葉の奥にある「気持ち」を聞き取るということである。しかし現実には、言葉尻を捉えて関係性が悪化するということも、頻繁に見受けられる。

⑦の「失敗を受容」とは、「失敗は、チャレンジの証」「失敗は、学習のチャンス」と思えるということである。しかし、「失敗」に対して「負のイメージ」を抱いている場合も多く、なかなか受容できないという現実もある。

アドラーは、「個人心理学」の創始者であると同時に、世界で初めて児童相談所を開設した人物でもある。アドラーの関心は「子どもたちの教育」に向けられていたの

³ 岩井俊憲「勇気づけの心理学」（2002 金子書房）

である。アドラーは、道半ばにして帰らぬ人となってしまったが、彼の高弟であるルドルフ＝ドライカースが、彼の遺志を引き継ぎ、アドラー心理学を「教育」の世界に広めていった。

日本では、岸見一郎の「嫌われる勇気」が上梓されると同時にアドラー心理学のブームが沸き起こったが、もともとアドラー心理学は「教育」に有効なものとしていたのである。

私たち教師は、「教育」によって、子供たちの成長を促そうと思っている。自らの力で社会を生き抜いていけるだけの力をつけてもらおうと考えているのである。「教育」とは、そのような「自立」の試みであり、「社会化」を意図した取組なのである。

そのような思いを抱いているからこそ、私たちの行為は「操作的」になりやすい。「アドラー心理学は、教育にとっても有効であるらしい」ということを耳にして、「教育にアドラー心理学を生かしたい」と思った良心的な教師がまずぶつかるのが、「操作性」と「非操作性」の壁である。アドラーは、「自分の思うように子どもを操作してはならない」と言っているが、「教育」を「自立に向けた意図的な試み」と考えている教師は、「操作しないで、どうして理想に向けて歩かせることができるのか」と疑問に思ってしまうのである。

本編のテーマである「勇気づけ」についても、たくさんの書物が出版されている。そうして、それらの中には、「勇気づけ」の具体的方法がたくさん記されている。『えらいね』とほめるのではなく、『ありがとう』と感謝の気持ちを述べる。「『あなた』を主語にしたしゃべり方ではなく、『私』を主語にしたメッセージを使う」などである。しかしおそらく、書物に書かれていることをそのまま実行に移したとしても（実行に移すこと自体、とても難しいことだと思うが）、望むような結果は得られないだろう。なぜなら、「技術」以前の「姿勢（態度）」が身につけていないからである。

岩井俊憲は、「勇気づけるための言葉」以前に、「勇気づけを始める前にわきまえておかなければならない前提要件」に言及している⁴。

彼は、「勇気づけ」が大きな影響力を持つためには、「勇気づける人の態度」「勇気づける人と勇気づけられる人との日頃の人間関係」「ノンバーバル・コミュニケーション」「相手に関心を持つこと」の4つの要件が必

要だと言っている。

「勇気づける人の態度」というのは、「自分で自分を勇気づけることができる」ということである。ドライカース風に言えば「不完全である勇気」を持っているということになる。長所・短所を含めて「これが自分だ」と受け入れることができているということである。

「勇気づける人と勇気づけられる人との日頃の人間関係」とは、目の前の人をありのままに受け入れることができる関係になっているかどうかということである。どんな肩書を持っているか、どんなことをしたかなどを度外視して、目の前の人に、「人としての尊敬」を感じることでできる関係である。

「ノンバーバル・コミュニケーション」とは、言葉以外の伝達方法のことである。腹の底ではそんなふうには思っていないのに、言葉だけ「勇気づけ」のようなものを使っても、相手には「心」の方が通じてしまうということである。腹の底から「相手に対する敬意」を抱いていない限り、口にされた「勇気づけの言葉」は空しいものになってしまう。

「相手に関心を持つこと」とは、アドラーの言葉で言えば「相手の目で見、相手の耳で聞き、相手の心で感じること」である。「共感」と言い換えてもいい。

この要件を整える努力をせずに、書物に書かれているような「勇気づけの言葉」だけを真似しても効果は期待できない。アドラー心理学では「叱る」ことを否定しているが、相互尊敬のできている関係の中では、第三者から見れば「叱っているように見える言葉」が「勇気づけ」になるのである。そういう意味では、「言葉」そのものには、あまり大きな意味はない。

「雪のなまえ」に見る「勇気づけ」

「雪のなまえ」は「勇気づけ」の宝庫である。それについて、代表的な部分を挙げながら、考えていきたい。

1) 「共感」に目覚める英理子

英理子は、東京で編集者として働いている。学歴がないことにコンプレックスを抱いているが、人一倍努力することで、今の地位を得ていた。だからこそ、雪乃にはそんな思いはさせたくない、中学受験のため

⁴ 岩井俊憲「勇気づけの心理学」(P48～P68)

の塾へも通わせていた。

その思いは、雪乃が「いじめ」に遭って学校へ行けなくなっても変わらなかった。「いい？ 雪乃。きつこと言うようだけど、いつまでも逃げていたってどうにもならないのよ」という英理子の言葉は、雪乃に重くのしかかってくる。

だから、航介から長野移住の話が聞かされた時も、当然のこのように反対した。英理子は、自分が雪乃に関われば関わるほど、雪乃が追い詰められてしまっていることに、本当のところでは気づくことができているのでない。

そんな英理子に変化が訪れたのは、英理子と雪乃が東京と長野とに離れて暮らすようになってから半年ほど経った時だった。職場で人事異動があり、英理子は編集部から別の部署に異動となった。編集の仕事に心血を注いでいた英理子にとっては、その異動は、仕事への情熱を失わせるものだった。表面的には、今までと変わらずに仕事はこなしているが、心の底に「空しさ」が巣食っていた。その時になって初めて、学校にいけいない雪乃の気持ちに共感することができるようになったのである。

航介からは「雪乃は、かけっこの途中で友だちに足を引っかけられて転ばされたようなものなんだ。そんな子の腕を引っぱって、いきなり次の組に混ぜてスタートラインに立たせたところで、すぐに走り出せるわけがないだろう」と言われて、納得する。それまでは、同じようなことを言われても、聞く耳を持たなかったのに。

それ以前にも英理子は、「いいんだよ、学校のことは何も焦らなくて」と、ことあるごとに雪乃に告げていた。しかしそこには、そうはいいながらも「学校に行ってほしい」という母親の思いが込められていた。敏感な雪乃は、その思いを感じ取って、自分で自分を責めていたのである。

ところが、英理子が心の底から雪乃を理解することができた時、英理子の雪乃にかける言葉は同じであっても、雪乃に届く気持ちは変わっていったのである。

「寄り合い」の夜に、移住先の人々に向かって英理子が口にした言葉は、心の底から雪乃のことを考えたものであり、その思いが雪乃に届いたからこそ、雪乃はしゃくりあげるように泣き出したのである。

アドラー心理学になぞらえて考えていくと、当初の英理子には「優越コンプレックス」があったように思える。「学歴のコンプレックス」を補償しようとし

て人一倍頑張る。それによって、心の安定を目指そうとしたように感じられる。しかしそのように頑張ることで、周りが見えなくなってしまう。自分が「色眼鏡をかけて判断している」ということに気づかず、「自分は正しい」という一念で突っ走ってしまうために、周囲は、当人が想像もできないような精神的負担を強いられる。

英理子は、「頑張ることで認められる」というイラショナル・ベリーフから、少し自由になることができた。雪乃にとって、母親のこの変化は大きい。そして、英理子の変化に大きく関わっていた人物が航介である。

2) 「対等な関係」を大切にす航介

航介は、英理子と対照的である。英理子のように堅実に物事を進めるのではなく、思いついたらすぐに行動してしまう。そんな「軽さ」が、周囲を穏やかにしてくれる。

「仕事を辞めて東京を離れてしまうと、自分が笑えなくなってしまう」という英理子に対して、航介は「雪乃のためだとか言って、俺ら夫婦のどちらかが無理に自分の生き方を曲げたりしたら、いずれどこかしらに歪みが生じて、結局は雪乃にしわ寄せがいくだけなんじゃないの？ きみが心から笑えない状況で、人の気持ちに誰よりも敏感なあの雪乃が笑えるわけないんだからさ。それこそ、罪悪感を抱かせてしまうだけでしょ。自分が学校へ行けないのが原因で、お母さんに我慢させている、っていうふうになさ」と答えている。ここには、学校にいけいない雪乃に対する「同情」の気持ちはない。「同情」とは、当事者よりも一段高いところから「かわいそうに」と思うことである。航介にも、雪乃の辛さはわかる。しかし、そこには、雪乃に対して「自分では問題を解決することができないから、親が代わって何とかしなければならぬ」という思いはない。腕を引っぱって歩かせるのではなく、いつ歩き出しとていいように、ずっと傍にいるというような温かさがある。

東京に帰る英理子を駅まで送っていった後、航介は、その足で雪乃を、彼女が通うことになっている冬休み中の小学校に連れていく。その時雪乃は、年末から年始にかけて長野に来ていた母親が、学校のことを何も言わなかったことに対して、「学校のこと、何も言わなかったね」と口にする。それに対して航介は、「母

さんにはまた別の考えがあるかもしれないし、俺と母さんのどっちが正しいとか間違っているとかは言えない。どっちの意見にも正しい部分があるのと同時に、もしかすると両方とも間違っているかもしれない。だからこそ雪乃には、遠回りでも、自分の頭で考えて答えを出してほしいと思うわけさ。学校へ行く行かないは別にして、とにかくまずは、今の時点できみが感じている正直な気持ちを見きわめることが大事。それから、どんなことのためだったらもうちょっとだけ頑張れるかな、って考えてみる。雪乃にも、あるだろう？理由はなけれど好きなものとか、興味を持っていることがさ」と答えている。ここには、親として子供に教えるという「縦の関係」はない。航介は、苦しみの中で一生懸命に考えている娘を「自分で考えることのできる力を持っている人」と捉え、敬意を示して話をしている。

大輝の母親が精神的な病を発病して自宅で療養しているということを航介から聞いた雪乃が、大輝の置かれている状況に共感して言葉を発することができなかった時にも、「きみのそういうところは、いいねえ。俺はさ、このとおり、人の気持ちもかまわずにいろいろ知りたがり過ぎるだろ？ 英理子さんはとて言えば、自分こそは知っておくべきだという信念のもとにやっぱり踏み込みすぎる。でもきみは、一にも二にもまずは相手の立場になって、好奇心の手前で踏みとどまることができるじゃないか。それって、誰にでもできることじゃない。じつはすごいことだよ」と答えている。

とにかく航介は、よく雪乃を見ている。「学校に行くことができていない」ということで一杯いっぱいになり苦しんでいる雪乃に対して、その「いいところ」を、さりげなく、具体的に指摘しているのだ。航介が心の底からそう思っているからこそ、その言葉は雪乃の心に届く。「勇気づけ」とは、口に出された「言葉」ではなく、その人に対する「思い（信頼・尊敬）」なのだということを再確認させてくれるエピソードである。

航介は、「納屋カフェ」についても、よく雪乃に相談している。雪乃自身は「小学生の娘に相談したところですごいアイデアが返ってくるはずもないのに」と思っているのだが、相談されることに嬉しさを感じている。航介が相談するのは、雪乃を「対等な人間」と見て「人として尊敬している」からである。

そのような航介と雪乃の関係に最もよく気づいていたのは、自分を見つめ直すことに成功した英理子だっ

た。

「寄り合い」の夜の場面で、英理子は、村の人々に向かって言う。

「ずっと休んでばかりでは勉強が遅れてしまう。五年生、六年生といえば中学受験の準備もしなくてはならないのに、と目先のことが心配で苛々するばかりの私と違って、夫は、ちゃんと娘の心と向き合っていました。学校なんか、行きたくなければ行かなくてかまわない。辛いことから、いつか逃げるのは弱さじゃない、自分の身を守るためには当たり前のことだ。ずっと逃げたままじゃいけないけれど、焦る必要はないんだ」

その言葉は、村の人々に向けて発せられたものであったが、同時に、英理子自身にも向けられたものであった。そうして、航介や雪乃に向かっても。大切なことに気づいた英理子は、「学校という、とても狭い場所で人間関係に傷ついてしまった子どもを、可哀想だからとただ囲い込むのではなくて、むしろもっと大きくて濃い人間関係の中で回復させてやる……それってきっと、間違っていないと思うんです」と、「村の持つ力」にまで言及していく。

航介は、意図して周囲を変えていこうとしているのではない。自分の生き方を全うすることで、彼の考え共感する人を増やしていくのである。彼の「人を信頼する気持ち」「人を尊敬する思い」が、「仲間」を増やしていく上での大きな原動力なのである。ここには「操作性」を超えたものがある。

3) 「ヨイ出し」名人の茂三とヨシ江

東京の暮らしで傷ついた雪乃の心を癒す上で、茂三とヨシ江の存在は欠かすことはできない。

基本的に二人は、長野の田舎で農業に取り組む朴訥な老人として描かれている。雪乃は彼らの曾孫である。「孫は目の中に入れても痛くない」と言われるが、茂三とヨシ江の雪乃に対する思いには、それ以上のものがあるのかもしれない。

田舎の老人にとっては、「自分たちの時代には、貧しさのために学校に通えない者がいた。今は、そのようなことがないのだから、学校に行けるだけありがたい。それなのになぜ学校へ行かないのか」という思いもあったことだろう。しかし茂三もヨシ江も、そんな思いはおくびにも出さない。父親と一緒に農作業を手伝う雪乃をありのままに受け入れ、

「普通の子」として扱っている。つまり、雪乃の置かれている状況を理解しながらも、「かわいそうだ」と同情して庇うのではなく、「一人前の人間」として対応しているということである。この二人からも、他者に対する「尊敬」というものを感じることができる。

航介が一人で東京の英理子のところに行ってしまった留守の間、雪乃は茂三に向かって「航介の代わりに、畑仕事を手伝う」と言う。そして「明日は1時間早く起きる」と約束する。

しかし翌日、雪乃は寝坊してしまい、雪乃が起きた時には、茂三はすでに畑に行ってしまうていた。

出掛ける時に茂三は、寝坊して起きてこない雪乃のことを「雪乃が自分で、まっと早起きして手伝うから連れていって言ったんだわ。こっちが起こしてやる必要はねえ、起きてこなけりゃ置いていくまでだ」と言っている。ここでは、アドラーの言う「課題の分離」が行われている。他者の課題を引き受けずに、当人に返す。これは「勇気づけ」である。

遅れて畑に到着して謝る雪乃に向かって、茂三は、「いっぺん目覚まし時計止めて、そんでもなお自分で起きたっちゃうなら、そりゃあてえしたことだ。起きようと自分で決めて、いつもより早く起きただもの、堂々と胸張ってりゃいいだわい」と言う。「約束を守れなかった」ことを非難するのではなく、「守ろうとして努力したこと」に焦点を当て、それを具体的に説明して認めていく。これも、「勇気づけ」以外の何物でもない。

また、物語の終わり近くには、大輝が、友達3人を連れて、雪乃の家に来る場面が描かれている。雪乃は、大輝のデリカシーのない行動に戸惑い、大輝に対して怒りを感じる。そんな雪乃に対して、茂三は、大輝たちが帰る時に、雪乃に向かって「そのへんまで。みんなを送って。わざわざ訪ねてきてくれた相手に礼を尽くすのは、人としてあたりまえのことじゃあねえだかい」と言う。

雪乃のように、心の中に大きな苦しみを抱えている子を見ると、「何もなくていいよ」と甘やかしがちになる。しかしそれは、当人のことを、しっかりと見ていないからである。茂三は、雪乃のことを確実に理解していた。だからこそ、この言葉を口にするのができたのだ。

確かに、東京の学校では苦しい思いをした。しかし、大輝たちは、雪乃をいじめた人間とは確実に違う。確実に大輝に心を開き始めている雪乃に、大切な一歩を

踏み出すための勇気を、この言葉は与えてくれている。

4) 「自己開示」の上手な大輝

大人たちがどんなに頑張っても、もしかしたら雪乃は、再び自分の足で歩き出すことをしなかったかもしれない。そういう意味では、大輝の存在は大きい。大輝は「ありのままの自分」を受け入れ、裏表がない。そんな純粋な姿が、少しずつ雪乃の心に変化をもたらしていく。

大輝は、航介の幼馴染の広志の息子で、雪乃と同じ小学校5年生である。広志が航介の納屋カフェの手伝いをしているので、広志と一緒に行動している大輝は、必然的に航介と一緒にいる雪乃との関わりが深くなっていく。

雪乃は当初、ぶっきらぼうな大輝に対して「デリカシーがない」と違和感を抱いていた。しかし、学校が休みの時には、大輝は、広志と一緒に、航介の納屋カフェの準備を手伝っている。航介の手伝いをしている雪乃とも、必然的に会う回数は増えていく。一緒に納屋カフェの準備をしていくうちに、雪乃は大輝に心を開いていくようになる。

大輝は、精神的な病を患って自宅療養している母親とは、離れて暮らしている。だからなのか、大輝は、「デリカシーがない」と言われながらも、雪乃のことを見捨てるようなことはしない。

雪乃が曾祖母のヨシ江と一緒に葡萄の摘房をしている時、ヨシ江は大輝のことを語る、「あの子が、雪ちゃんのことほっとくはずがないでしょう。きっと、周りにすーっと溶け込めるように案配してくれるだわ」と。

周囲からそのように見られている大輝は、物語の最後の方で、3人の友人を連れて、雪乃の家を訪れる。雪乃は予想外の訪問者に心を乱し、家から飛び出してしまう。

大輝は、自分の気持ちに正直である。放課後だけでなく、いつでも雪乃に会いたい。大輝のデリカシーのない行動は、雪乃を動揺させはするが、「雪乃のため」というよりも「自分の気持ちを満たすため」という思いが前面に出ているために、それほどの負担を雪乃に負わせてはいない。この自然な振る舞いが、雪乃に勇気を与えていくのである。

5) 「共同体」の中で生きる村の人々

その他にも、たくさんの人々が雪乃と関わり、その中で雪乃は動き出せるようになっていく。長野の村には、今の東京では失われてしまった「共同体」が存在していた。

農業という「自然」と会話しながら進めていく仕事に従事している村人たちは、お互いに助け合いながら生活するという当たり前のものとして受け入れている。困ったことがあれば、助けられる人が助ける。納得できないことがあれば、心の中にしまっておかないで、きちんと伝える。贅沢は望まず、今日一日を無事に過ごせればそれでいい。そんな思いで毎日過ごしているのだ。

時にぶつかり、口論になることはあっても、翌日には何も無かったように、普通の関係に戻っている。

友人を連れて雪乃の家を突然訪問した時に、大輝は雪乃に向かって「雪っぺは、全然普通だ」と言った。その大輝の言葉の通り、この村に暮らす人々は、みな「普通」なのだ。かつての英理子が、何かに取り憑かれたように仕事をして自分を追い込んでしまったような窮屈さは、この村の人々からは感じる事ができない。

この村に流れるゆったりとした時間、信頼によって結ばれた村人たちの関係性、自然との共存。そのようなものに囲まれて、雪乃の心は癒されていったのである。そうして、次第に心の窮屈さから解き放たれていった雪乃は、自分を振り返り、自分の進むべき道を、自ら見つけていったのである。

まとめ

私たちは「不登校」問題について、今まで、当事者に焦点を当てるといふ対応しかしてこなかったのではないだろうか。

休みが目立ち始めた段階で当事者と面談をし、何とか学校に来られるようにと対応する。当事者に会えないような状況なら、保護者と連携をとり、支援の方法を考えていく。対応チームを作り、チームで支援するというのも行う。カウンセラーなどの心理の専門家に繋いだり、相談室登校や保健室登校などで支援したりもする。スモールステップを用いて、できることに少しずつ取り組ませていくようなこともする。

しかし、本人を取り巻く環境への働きかけはどうだったのだろうか。本人への関わりと比べると、その比率はあ

まりにも低いように感じられる。

人は「環境の中で生きる」生き物である。環境の影響を大きく受けるのだ。だから、「不登校」対策には、当事者への働きかけと同時に、「環境調整」をはかることも大事になってくるのである。

「雪のなまえ」には、環境というものがどれだけ大切なものであるかが、綿々と綴られている。環境が変わることで、本人自身も変わっていく。「雪のなまえ」には、そのことが綿密に書き込まれているのだ。

では、「環境を変える」にはどうしたらいいのだろうか。そのために参考にしたいのが、アドラー心理学の「勇気づけ」である。

従来「勇気づけ」は、その「方法」に焦点を当てていたように思える。しかし、「方法」以前に、「姿勢（態度）」というものがしっかりと根付いていなければ、それは「砂上の楼閣」となってしまう。

「不登校」に直面したとき、私たちは「早く登校できるようにすること」を目指してしまう。しかしそれでは、当人は追い詰められ感を感じて苦しむだけになってしまう。航介のように「辛いことから、いつか逃げるのは弱さじゃない、自分の身を守るためには当たり前のことだ」と、腹から思えるようになることが必要だ。

さらに、「その子のため」と言いながら、実は「自分のために」学校に行かせようとしていることに気づくことも必要である。私たちは、当人が学校へ行けるようになるために様々な支援を試みるが、よく考えてみるとそれは、「間違っただけをやっていない」と周囲から認められるためにやっているという場合が多い。これを見きわめ、受け入れることができないと、本当の意味での支援はできない。

「勇気づけ」は「技術」ではない。「態度」である。「雪のなまえ」は、私に、そのことを改めて教えてくれた。

テキスト

村山由佳「雪のなまえ」（2020 徳間書店）

参考文献

保坂亨「不登校をめぐる歴史・現状・課題」（2002

「教育心理学年報」第41集 P157～P169）

文部科学省「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」（2019）

岩井俊憲「勇気づけの心理学」（2002 金子書房）